

氏 名	山 形 恭 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 368 号
学位授与の日付	平 成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	初期描画における表象活動に関する発達心理学的研究

(主査)

論文調査委員	教 授 清水御代明	教 授 鯨岡 峻	助教授 藤田和生
--------	-----------	----------	----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、3歳頃までの初期描画の発達について、従来の描画発達理論の妥当性を検討し、対象表現成立に至る発達過程ならびに発達規定因を実証的に明らかにして、初期描画に関する新しい理論モデルを構築することを目的としており、長期の縦断観察を含む10件の研究と、その結果に基づく新しい理論モデルの提案からなる。

研究1と2では、ほぼ3歳までの縦断観察によって、対象表現成立に至る発達過程を自力場面と対人場面で比較検討し、対人場面を中心に初期描画を分析した。研究1ではほぼ3歳までの日誌法による縦断観察を通じて、家庭における対人相互交渉の基礎資料が収集された。研究2では、遊び場面における母子の行動が縦断的に記録され、分析された。子どもは1歳代に養育者に描画を依頼し、さらに描画テーマを提案して描画活動を共有し、そこに参入して何かを描こうとすることが示された。初め養育者が描画活動を主導して共有課題の足場を作り、子どもがそこに参入することによって子どもひとりの場合より発達的に進んだ描出を行い、次いで子どもが主導して自力で対象表現を漸次実現することが実証された。描画の初期段階は無意味なぐり描きの時期とはいえず、対人場面においてはすでに1歳代に表現意図や表象的表現活動の萌芽と発展が認められること、さらに、対象表現が自生的に発現するのではなく、対人的文脈に先導されて現出することを指摘して、従来の理論に対する疑問を提起している。

研究3と4では、絵本の絵を刺激図形として、それに対する落書き資料が分析される。研究3では3歳未満の17名の幼児から落書き資料を収集し、研究4では1児の落書き資料を縦断的に検討して、落書き部位と落書き様式の分析から、絵刺激に対する落書きは、でたらめな線描ではなく、絵本の絵の人物や動物、乗り物に、また、人物や動物の顔、目、口の部位に頻出することを見出し、絵刺激やその特定部に焦点を当てた有意意味な描出であることを示している。幾何図形を用いた先行研究と異なり、子どもにとって有意意味な刺激図形を用いた場合には、1-2歳児もでたらめに落書きするのでなく、絵刺激と関連する表象的な線描活動を展開することが実証された。

研究5-8では対象表現を一種の問題解決事態と捉えて、構成要素の体制化に基づく構成活動の分析により、対象表現の成立過程を検討した。対象表現は対象の構造に従って対象の特徴を分解し、構成要素として画面に表わす課題であり、構成要素を画面にどのように位置づけ、どのような順序で描くかの立案が要請される。こうした構成活動がどのように芽生え、どの時期にどのような構成要素を産出して体制化し、対象表現に到達するかを、左右で対をなす目などを両方連続して描く対表示と、対の左右の描出順、上下の描出順を指標として検討した。研究5では刺激図形として輪郭(楕円)を与える輪郭付与条件と輪郭なし条件とを設定し、1歳半~3歳半の5年齢群で、研究6では2児の12ヵ月からの縦断研究で検討した。1歳児は対象の特徴を明確に描けなかったが、2歳代に目の対表示が輪郭と共に描かれ、加齢にともなって構成要素の体制化が上下方向や左右方向に組織的に高次化されることが示された。また、輪郭付与条件は輪郭と構成要素の統合が促されて表示法の習得に寄与するとの予想通り、1歳と2歳、2歳半群で輪郭付与の促進効果がえられた。これらの結果は、初期構成活動が構成要素に基づいて段階的に組織化されることを示すとともに、1歳時に特徴の抽出、2歳代で表示法の習得の2

つの下位過程が関与している可能性を示唆し、この2下位過程の仮説が、研究7と8で検討された。輪郭付与条件と、簡単な描画を与えて描かせる描画付与条件（研究7）および絵を与えて塗らせる絵画付与条件（研究8）が設定された。1歳児が自力で特徴を描くことはできないが特徴を抽出することはできるなら、描画付与や絵画付与が促進効果をもつと予想される。1歳半と2歳群において絵画付与による促進効果がえられ、1歳代でも特徴抽出が可能であることが示された。

研究9では対象表現（人物画）の成立と描線発達との関連が追求される。8種類の描線（渦巻き円・円・点々・点・複縦線・単縦線・複角線・角線）について、どの描線の発達が人物画の成立と関連するのかが、相関と発達曲線に基づいて検討された。人物画成立は2歳から2歳半に急速に進むが、それと同期して円・単縦線・複縦線の描線が発達することが示された。

研究10では、シンボルの発達水準の観点から、言語と象徴遊びに関するL. McCune-Nicolichの仮説に依拠して、言語、象徴遊び、描画の間に構造的対応が見られるかどうかを検討した。描画は言語や象徴遊びに比して発達は遅れるが、同様の発達順序をたどることが示された。描画発達の遅れは表示法の習得と運動面の発達に帰することができると解され、描画の発達は言語や象徴遊びの影響を受けている可能性が示唆された。

初期描画に関する従来の理論が妥当しないことが明らかにされたことを受けて、新たに経験と成熟の相互作用に基づく複合的構成理論モデルが提案される。0歳代のコミュニケーションと対象認知の発達を基盤に、対人的文脈における足場作りを介して初期描画が出現し、1歳中期の対人場面を介した表現可能性の理解、描線のシンボル性の獲得、表現意図の芽生え、1歳後半の対象の特徴抽出とその描出の出現、表現意図実現の試み、2歳期の表示法の習得と描線制御発達にともなう視覚的形態に基づく描出の出現、2歳半時の構成要素の体制化にともなう初歩的図式画の成立、3歳時の諸構成要素の統合に基づく図式画の成立という、諸段階を経て発達すると主張している。

論文審査の結果の要旨

G. H. Luquetに代表されるこれまでの描画発達理論は、初期描画段階を「機能の快」に基づいて無意味な線を描くなぐり描きの時期と位置づけ、そのような自己の描線の中に対象の形態を偶然発見して命名する「偶然の写実性」を契機に表現意図が芽生えて、3歳頃に対象表現が自生的に成立するとみなしてきた。また、J. Piagetらのシンボル形成論も、この描画発達理論に基づいて、初期描画を身振り動作から現出するなぐり描きと位置づけ、命名を介して対象表現が生成されると捉えている。今日まで定説として広く容認されてきたこのような見解について、論者は次のような問題点を指摘する。(1) これらの理論は事例観察からの断片的な例示を主張の根拠にしている、資料の十分な集積によって確認されてきたとはいえない。(2) これらの見解は、「偶然の写実性」がなぐり描きからどのように生起し、対象表現がどのように成立するかを定式化していない。(3) 描画活動を介したコミュニケーションが対象表現の発達に及ぼす影響の側面を無視している。本論文は、描画活動を介したコミュニケーションに着目し、長期間の縦断研究を含む10件の研究を通して、この定説を吟味し、描画の初期段階の特質を解明しようとした論者多年の研究の成果であり、次のような点に論文の意義を認めることができる。

(1) 初期描画段階を無意味ななぐり描きの時期と位置づける従来の描画発達理論の見解を覆えし、初期描画段階に既に表象的表現活動の萌芽と発展が見られることを実証して、これまで詳らかでなかった初期描画発達過程の特徴と発達規定因を明らかにした。

(2) 従来の描画発達理論が、対象表現は、なぐり描きの描線に対象を見る「偶然の写実性」を契機に表現意図が芽生え、「出来損ないの写実性」を経て「図式画」へと自生的に発達するとみなしてきたのに対し、母子のやりとりや刺激図形の呈示が促進効果をもつという研究結果から、対人的文脈における足場作りなどの社会文化的要因が表現意図の表明や図式的表示法の獲得に寄与していることを示した。初期描画をこのような視点から解明した研究はこれまで報告されておらず、本研究は初期描画研究に新しい局面を切り拓いたものと認められる。ただし、論者が、「自生的発達」という語をもって直ちに従来の説を成熟説と規定している点にはにわかに賛同しがたい。

(3) 本論文はまた描画発達に関与する諸要因を明らかにし、成熟と経験の相互作用による複合的構成理論を提案している。主として成熟による描線発達と、経験に作用する対人場面や刺激図形付与による社会文化的支援システムの、どの要因がどの段階にどのように作用しているのかを実証的に明らかにした。

(4) 論者は、描画発達を0歳代の知覚・認知ならびにコミュニケーションの発達の延長上に定式化している。子どもは0歳代に対象や対象の特徴を知覚的に把握するが、それらを基礎に1歳代にシンボルとして対象や対象の特徴を表わそうとし、表示法の習得にともなって視覚的形態に基づく対象表現が可能になることを実証的に跡づけた。

(5) シンボル形成に関する研究はこれまで言語発達を中心に進められ、シンボルの一形式である描画については等閑に付されてきた。初期描画段階はちょうどシンボル機能が発生する興味深い時期に当たるが、本研究はそのような段階のシンボル間の関係について示唆に富む結果を得ている。描画は言語や象徴遊びよりやや遅れて発達するが、発達順序には基本的な同型性が認められた。描画の発達の遅れは、描画発達に対する言語などの影響の可能性も推察させ、シンボル形式間の機能連関考察の手がかりを与えるものといえる。なお、論者が描画発達の遅れを描画の領域固有性を示すものと論じている点については、そのような規定の有効性を巡って論議のあるところだと思われる。

(6) 描画発達はこれまで描画のみに局限して研究されてきたが、表象や計画立案など、より広い視点から捉え直した点も重要で、今後の研究方向を指し示すものといえる。

個々の研究については、より大きい情報を得られる条件設定もありえたのではないかと惜しまれる部分もあるが、幼児の初期描画が母子相互作用を中心とする対人文脈中でなされることに着目し、先行研究の少ないこの分野で、丹念な観察や、対人場面と独力描画場面の比較や呈示刺激の操作による実験を積み重ね、定説に対する反証を含む貴重な資料を得て、初期描画発達過程に新しい知見をもたらした成果は高く評価できる。

以上審査したところにより博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお1999年2月9日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。